

「詩人の夢の継承事業」

山中知彦（株式会社 都市建築研究所 / 「ヒアシンズハウスをつくる会」世話人）

1. はじめに

本論の目的は、埼玉県さいたま市内の別所沼公園において、市民の寄付にもとづき進められている「詩人の夢の継承事業」を紹介するとともに、その事業の意味を都市景観の観点から考察することにある。

早逝した詩人立原道造(1914-39)は、将来を嘱望される建築学徒でもあった。1937年3月に卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」を提出し、東京帝国大学工学部建築学科を卒業した立原は、石本建築設計事務所に入社したその年の冬から1938年の春にかけて、旧浦和市別所沼のほとりに、自らが住まうための週末住宅を建てる夢を育んだ。当時、別所沼付近には、友人で詩人の神保光太郎をはじめ、画家の須田剋太、里見明正ら多くの芸術家が住んでいた。立原は5坪ほどのその週末住宅を「ヒアシンズハウス（風信子荘）」と呼び、50通りもの試案を重ね、多くのスケッチを残している。

「詩人の夢の継承事業」は、2003年4月にさいたま市の政令指定都市化に伴い、別所沼公園の管理が埼玉県からさいたま市に移行された機会に、立原が描いた幻の週末別荘「ヒアシンズハウス」を市民の手で文化拠点として形あるものにしようと、地域の建築家や文芸家らが世話人となり発意され、2004年4月に着工、11月に共用開始予定の事業である。

2. 浦和における別所沼の場所性

別所沼の位置するさいたま市内旧浦和市域の地形は、関東平野の洪積台地の一つである大宮台地の南端と西の荒川低地、東の中川低地、南の川口低地の三つの沖積低地によって構成されている。さらに大宮台地は南端で多くの支台に別れ、浦和は坂の多いまちとして知られている。

大宮・浦和支台（鹿島台）の尾根筋に形成された浦和の市街地は、江戸時代に整備された中山道の浦和宿が母胎となり、その後明治初期に埼玉県庁が、明治中期から大正にかけ師範学校や旧制浦和高校が設置されるなど、行政・文教のまちとして発展した。1923年の関東大震災以降、被災地の京浜地区からの移住者が増加し、昭和にはいると長谷川かな女（俳人）や寺内萬治郎（画家）をはじめとする文化人や公務・自由業の人たちの流入があり、特に被災の少なかった鹿島台から別所沼にかけての高台一帯の新興住宅地化が進んだという。注1)

別所沼は、鹿島台と、稲荷台（与野支台）の間のできた浸食谷の沖積低地にある沼である。水源は台地からの湧水と天水で、江戸時代中期の史料に下流域の水田灌漑用溜池として利用された沼としての記録があり、昭和初期までは沼の周辺は湿地であった。

昭和の初期に東京・深川の小島長次郎氏が別所沼



図・1 浦和における別所沼の位置（平成15年発行）



図・2 昭和初期の左図同位置図（昭和6年発行）

周辺一帯の土地を買い受け、桜を植え、藤棚をつくり、遊観地としたという。文献6)

昭和初期の浦和、特に別所沼周辺には多くの画家が住み、「鎌倉文士に浦和画家」と呼ばれ一種の芸術家村の様相をみせていたという。注2)

別所沼は、その後1951年に旧浦和市が都市公園として整備し、1956年に県の所管となりさらに整備がなされた。都市公園開設当初は高木が目立たず、周辺が湿地の時代の面影を宿した景観であったが、1955年米国から移入されたラクショウ(通称ヌマスギ)を移植し、現在では600本近くが沼畔に繁茂し、非日本的な独特の景観を形成している。文献7)



写真・1 大正時代初期の別所沼 文献8)



写真・2 1961年の別所沼公園 文献9)



写真・3 現在の別所沼公園

従って、別所沼は古くからの旧浦和市民にとっては、かつての「鎌倉文士に浦和画家」と呼ばれた当時の独特の地域文化との関連上に思い描かれる傾向が強いが、過去を知らない新しいさいたま市民にとっては、水辺の緑の風景と散策やジョギングを楽しむ格好の場として親しまれ、市内で最も利用者の多い公園である。

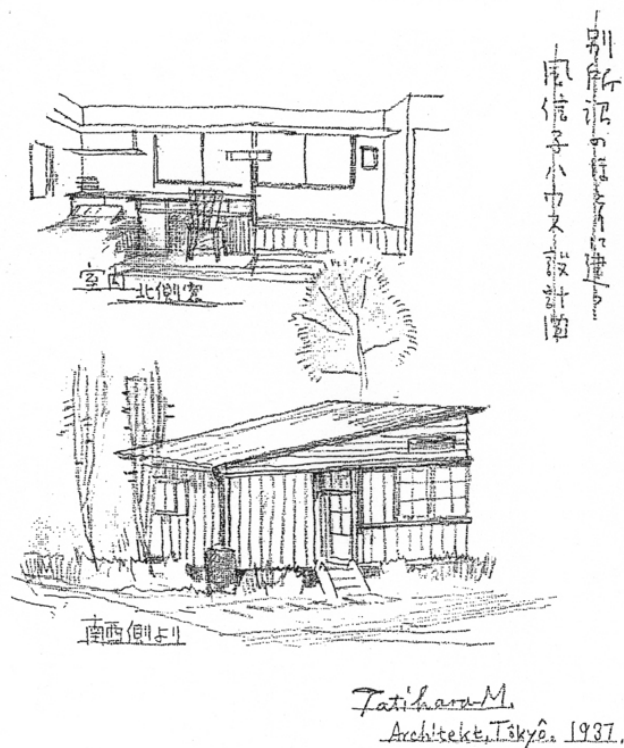
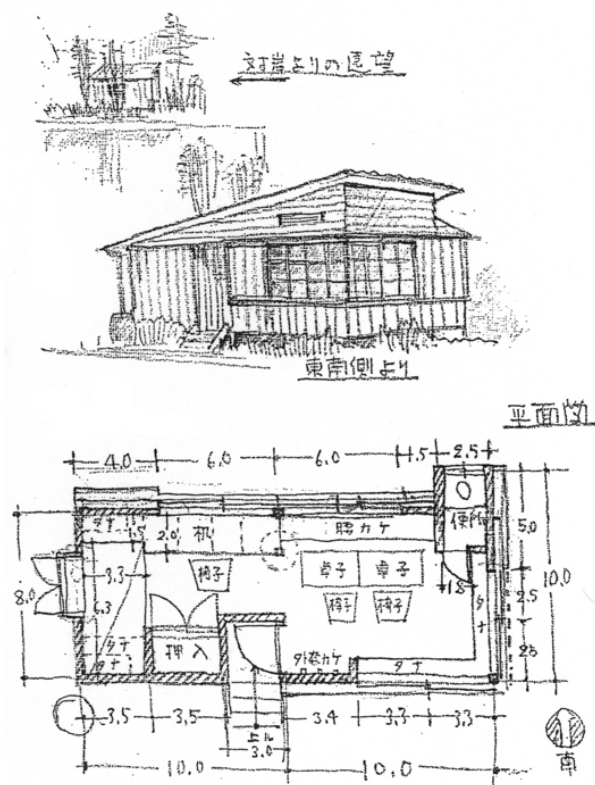
3. 別所沼にヒアシンズハウスが構想された所以

立原道造がなぜ別所沼にヒアシンズハウスを建てようとしたのかについては、私淑する詩人神保光太郎が別所沼の近く(当時:浦和市鹿島台2072)に住んでいたことによるとされている。立原道造全集の年譜によれば、彼が神保光太郎と知り合うようになったのは、詩誌「四季」の1935年6月号で共に原稿を発表後、1935年7月15日に「お茶の水駅近くのレストランで歓談」との記録文献11)が見られる。立原道造全集の書簡集には、神保宛書簡は1935年8月6日付けから、1938年10月26日付けの間、26通が掲載されている。1936年6月14日付けの書簡には、既にこの時点で訪れていたのか、あるいは神保から話を聴いていたのか、別所沼や浦和に関する記述注3)が見られ、さらに1937年1月26日には、神保宅に一泊した記録が残されている。文献11)

一方、ヒアシンズハウスに関する記述は、1937年12月17日付小場晴夫宛の封書に始まり、翌1938年4月上旬(想定)深澤紅子宛の封書までの約4ヶ月の間の5通の書簡に見られる。注3) さらに、現存するスケッチ類も、1937年12月頃の生田勉宛に始まり、翌1938年2月の猪野謙二、小場晴夫宛までの6種類注4)が確認されている他、「埼玉県浦和市外六辻村別所ヒアシンズハウス」と書かれた名刺までも残されている。文献1)

立原の交友関係の中でも最も親密に接していた建築学科の同級生の小場晴夫が旧制浦和高校の出身であることを考え合わせると、ヒアシンズハウスの構想を抱く少なくとも1年半以前に、立原の中に浦和のまちが意識されていたことが考えられる。

当時立原は、日本橋の生家と「四季」の同人の集まる信濃追分を往復する経路上の浦和駅で下車し、中山道の宿場町の面影の濃い浦和宿を経て、当時早稲田大学兼東京美術学校教授であった岡田信一郎の設計による洋風建築の公会堂埼玉会館(1926年竣工)の前の坂を下り、県庁前の坂を登り、神保の家をはじめ和洋折衷の住宅が建ち並ぶ高台から、葦原のひろがる湿地への急な坂道を降り別所沼に至るといふ浦和の都市空間のシーケンスを体験したはずである。1938年4月上旬頃の深澤紅子宛書簡からは、別所沼周辺の画家達との交流の様子も伺えることから、当時の立原が浦和のまちの状況や芸術家のコミュニティに無関心であったとは考えにくい。



図・3 生田家所蔵スケッチの一部（立原道造記念館）

これらの残された遺稿や当時の状況から、何故立原が自らの週末住宅を別所沼に建てようとしたかを考察してみるに、第一に神保光太郎の存在があったであろうことに加え、生活の中心であった東京との距離や中山道や鉄道で結ばれた日本橋と信濃追分との経路上の立地、さらには、卒業設計のテーマでもあった芸術家のコミュニティの存在、すなわち関東大震災後多くの芸術家を誘引したのと同じ生活圏としての浦和のまちの魅力にも大きな要因があったのではないかと推測できる。そして、そのことがヒアシンズハウスを着工する以前に、名刺をつくるに至った立原の気持ちを説明しようと思われる。

しかしながら、前述の1938年4月上旬頃の深澤紅子宛書簡を最後に、立原の書簡から一切のヒアシンズハウスに関する記述が消えることになる。一説には、浦和の冬期の寒さが、当時体調を崩し始めていた自身の健康に適さないことを知らされたからだともいう。機を一にして、立原最後の恋人水戸部アサイとの交際が始まる。文献11)

(右) 図・4 高田誠「浦和風景」1929年
立原と同世代の浦和画家。浦和中学在学中の1929年第16回二科展に「浦和風景」を初出品、初入選し評判となる。文献8)



写真・4 全国屈指のホールであった埼玉会館(文献5)



4．現存しなかった歴史的環境をつくる意味

ヒアシンズハウスは、立原のスケッチは残されているものの現存しなかった歴史的環境といえる。

現存した歴史的環境の復元や保全活用の事例は多いが、かつて存在しなかった歴史的環境をつくる例としては、英国の風景式庭園における「人工廃墟」注 5)やアントワヌ・グランバックのマルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンにおける実験注 6)などの僅かな事例に限られる。これらの例に共通する価値観は、現存した歴史的環境の復元や保全の場合における、文化財としての学術的な価値の保全とは異なる。グランバックの記述を引用すれば「建築史における近代性を批判する作業に携わって来ると、相互変換可能な瞬間の連続と考えられる時間によって、＜何でも可能＞とか、いわゆる開かれた工業化のイデオロギーは、やみくもに支えられているといえる。しかし、私としては、ここに＜倒置の考古学＞と名付けた設計方法論を組み上げたい。ニュータウンに関してみると、近代性や技術に対する批判は、ニュータウンに先行する想像力の都市の痕跡として構想される公共空間を実現することによって果たされる。・・・中略・・・ところで全ての近代建築運動支持者たちは、建築群と社会問題とを性急に同一視せんとして、彼らの古い街に沈積しているあらゆる層を取り去り、古い都市の類型を新しい都市形態に変換することを信条としていた。」文献 12)に見られるように、景観に時間的形象を組み入れることにより、近代合理主義的価値観では説明できない風景に表情や物語性を込めようとする意図がある。

文化財として歴史的なサンプルを保全するという学術的で説明しやすい立場に比較し、現存しなかった歴史的環境をつくる場合は、合理的には極めて説明しづらく、存在しなかった城を模した公共施設をつくる例などと同様、ことによると極めてキッチュな結果になりかねない。

「詩人の夢の継承事業」には、立原道造という著名な詩人が建築学徒として残したスケッチを、現実の建築として実現することによるある種文化財としての価値観と、別所沼周辺にかつて存在した芸術家のコミュニティの記憶を形象化することによって、現在の公園に歴史的な手掛かりを付加しようとする景観的な価値観とが共存する。一方で、当初一部の市民から「実現を断念した詩人のスケッチを後世の

人間が勝手に建てることは、詩人への冒瀆である。」とか「豊かな緑地景観である別所沼に、必要もない小屋を建てるのは、景観破壊である。」といった少数意見も寄せられた。しかし、これらの批判に甘んじないためには、文化財としての価値や景観としての価値に加え、ヒアシンズハウスが新たな市民活動の場として機能し、現代の地域文化コミュニティの形成に貢献することによって、詩人の夢を継承することが求められる。

5．何故広範な市民の支持を得たか

「詩人の夢の継承事業」は、2002年夏に、その後「ヒアシンズハウスをつくる会」世話人となる2名の建築関係者、2名の文芸関係者、1名の美術館関係者が集うことからスタートした。同年夏に世話人会を発足させ、2003年4月以降別所沼公園の管理を移管される予定のさいたま市との事前協議を始めた。また、2004年1月に、立原道造記念館に協力を求め、全面的な支援を受けることとなった。その後、記念館の建築担当者らを含め世話人を8名に増強し、具体的な事業の骨子案を作成し、さいたま市から広範な市民の理解を得ることを条件に公園施設設置の内諾を受け、2004年4月に別所沼公園内の会館で、建築史家と詩人の講演をはじめとする「ヒアシンズハウスをつくる集い」を催し、市民への事業の公表を行った。「集い」に集まった市民は、世話人の口コミと直前に掲載された地方版の新聞記事によって約100名のさいたま市民と「立原道造記念館」の広報による約50名の市外からの来場者で、定員100名の会場を立ち見を含む満席状態の熱気が包むことになった。「集い」盛況が報道され、さいたま市と「つくる会」の正式な協議が始まり、竣工後の管理主体を地域の任意団体である文芸家協会が担うことで、2004年2月「ヒアシンズハウスに関する協定書」をさいたま市と取り交わした。その後、公園施設設置許可、建築確認を経て2004年3月末に起工式、5月末に上棟式を行い、物的環境が整いつつある。実施設計は建築系大学教授を中心に建築関係の世話人が設計会議を重ね、立原のスケッチと当時の工法をもとに考証を進め、施工はものづくり大学の協力を受け、同大学生や立原の後輩に当たる東京大学工学部建築学科の学生も参加して進められている。現場には広報用看板を設置し、事業の趣意や関連新聞記事

を掲載し、多くの公園利用者が見入っている様子うかがえる。

建設資金は、建築、外構、内装備品を含め600万円の目標を設定し、36名の発起人、5つの団体の協力により2003年7月より一口3千円の募金活動を開始し、2004年7月現在約820名の寄付者から640万円の募金が寄せられている。



写真・5 竣工間近なヒアシンスハウス（2004年7月）

事業に賛同を頂いた地元の方々には別所沼や浦和を知っている方が多く、近年の浦和・大宮・与野市のさいたま市への合併や住民の世代交代の中で薄れゆく都市の場所性を回復する試みに対する共感が、一方別所沼や浦和を知らない方は、立原道造個人への憧憬の念とあわせ、地元の市民運動によって詩人の夢を継承しようとする「地域愛」への共感が広範な支持の要因になったと思われる。

注

- 1) 震災直後の大正12年には浦和町だけでも数百十世帯の転入があり（内務省社会局『大正震災志』上）翌年はさらに増え、浦和周辺の人口は急増し、震災前後の三ヶ年で1066世帯、3371人の増加を見た。浦和町への人口の流入はそのほとんどが京浜地区からであった。浦和町は昭和に入るや、足立台地の南端に位置する生活適地であることもあって長谷川かな女（俳人）や寺内萬治郎（画家）など文化人や公務・自由業の人たちを中心に人口の流入があり、東京に近接する郊外住宅地へと大きく変貌していった。昭和二年の地図を見ると、浦和町は鹿島台から別所沼にかけての高台一帯に住宅が建ちならび、富士見町、見晴町などの町名もあり、新興住宅地化がかなり進んでいたことがわかる。（参考文献4）p627
- 2) 昭和初期の浦和は、一種の芸術家村の様相を見せていた。昭和6年（1931）8月18日付『東京日々新聞』には次のように記されている。
美術の秋の前奏

6．地域文化資源のネットワーク化に向けて

今回の事業を通して景観の意味を考えると、ささやかな小屋の存在が、景観に現れない地域性を表象し、そのことが多くの市民の共感を呼び覚ますという景観の持つ強い表象作用に改めて気づかされる。さらに、景観をつくることに加え、景観を活用することによる地域文化の活性化が、景観整備の重要な目標として位置づけられることにも改めて気づかされる。景観というと一般的に「美しさ」という共時的な価値に重きが置かれる傾向にあるが、景観に表象される歴史や地域文化、あるいは景観の活用といった通時的な価値に対する評価がより強く求められてよいのではないだろうか。

また、今回の事業のように民間の非営利団体が公園施設を都市公園内に設置し管理するのは、埼玉県内では初めての試みであるという。しかも現存しなかったものの当該公園内に構想された歴史的資源の保全とつながった事業でもある。現在、文芸関係の世話人を中心としてヒアシンスハウスの管理運営会議を立ち上げ、市民に開かれ、市内の関連施設や地域資源と連携した管理運営体制の検討を進めている。そういった意味で、小さな試みではあるが、都市公園と地域文化をつなぐひとつのモデルとして、今後のヒアシンスハウスの管理運営を、多様な主体による公園管理のしくみの試金石として捉えていきたいと考えている。

灼熱の製作慾 浦和に有名無名四十名の画家

（前略）浦和町鹿島台こゝ文明の郊外は四十有余名のアルチストがさながら画描き村を現出してゐる。近づいた秋、絵画のシーズン、上野の森、美術館の壁面、製作慾と芸術への精進そして全人格をカンヴァス一塗々のタツチに集めて今や浦和の画家はインスピレーションに覚然としてカンヴァスに向かってゐる。・・・<中略>・・・帝展派の大家、中堅新人 相馬其一、奥瀬英三、跡見泰、佐藤三郎、小林信二、近藤陽二、小林量造の諸氏そして二科の急進派若き高田誠氏曰く無名の画家彼氏等々、それらが浦和の町を画家のアトリエと化し大貌である。（参考文献5）p834-835

- 3) 立原道造書簡から関連記述抜粋（参考文献10）所収）1936年（昭和11）6月14日 神保光太郎（詩人・『四季』同人）宛
別所沼のふじや、アンゴラ兎は元気ですか。桜草の野原へはいらつしやいますか。
浦和の町も、もう夏ですか。

1937年(昭12)12月17日 小場晴夫(東大建築学科同級生)宛

.....僕は疲れてゐる。何者にも。いつの間にか、僕は自分の晩年に就て 考へてゐる僕を見出す、どんな陽気な問ひからはじまつても、僕は やがて 自分の晩年をロマンのなかに悲しく描きはじめてしまふ。浦和に行つて沼のほとりに、ちひさい部屋をつくる夢、長崎に行つて 古びて荒れた異人館にくらす夢、みんな二十五六歳を晩年に考へてゐる かなしいかげりのなかで花ひらくのだ。

1938年(昭13)2月12日 神保光太郎宛

あなたのお言葉のをはりにも ヒアシンス・ハウスのことがしるされてゐましたので たうとう この手紙の最後に僕の夢をいちばんあとにまでかくしておかうとしたあなたに お知らせいたしませう 同封しましたのが その計画の製図されたものです 旗は 深沢紅子さんがデザインしてくれることになつてゐて それは僕にもどんなのが出来るのかわかりません ヒアシンス・ハウス・(風信子荘)といふ名前です(土地のことを具体的に早く定めなくてはならないのですがいつお会い出来るでせう)(中略) 2、同封の図面は二つありますが、地主さんにお会いになりましたら ちよつとお伝えおきねがひたく どちらでもいいから見せておいて下さい僕も行って 早く土地を正式に借り受けたいと存じます百坪などいらぬのですが あまりすくなくては貸してもらへないとおもひますので 百坪と申します 出来たら五十坪ぐらゐでいいとおもふのですが 五十坪のなかへ 四坪半の小家 を建ててもまだ広すぎる位です 3、里見さん(註:里見明正)にも はなしておいて下さい 僕は 近いうち 日曜日に もつと正確な設計図を持つて 浦和に行きます そのときに 僕がはなすことがありすぎると混乱してしまうだらうとおもひますゆゑ 予備知識を画家(註:須田剋太)たちに注ぎこんでいただければ幸せです (実行家のエスプリでせう)

1938年(昭13)2月中旬頃 深沢紅子(画家)宛

浦和が僕にあたらしいふるさとを与へてくれればいとねがひます。(中略) 浦和に建てるヒアシンス・ハウスの図面を同封しました。旗のデザインをして下さいましたら、たいへんにうれしく存じます。それは憲ちゃんにしてみらふ方がいいでせうか 三月ぐらゐまでにはこの家に移りたいとおもつてゐます。

1938年(昭13)3月下旬頃 高尾亮一(旧制一高での先輩)宛

.....それから、「ヒアシンス・ハウス」といふ週末住宅をかんがへてゐます。これは、浦和の市外に建てるつもりで土地などもう交渉してゐて、これはきつとこの秋あたりには出来てゐるでせう。五坪ばかりの独身者の住居です。これも冬のあひだしよつちゆうかんがへ、おそらく五十通りぐらゐの案をつくつてはすててしまひました。今やうやくひとつの案におちついてゐます。 図面で説明すれば、すぐわかるのですが、それはけふはやめ

にして、天長節においでのせつにおはなしませう。...

1938年(昭13)4月上旬頃 深沢紅子宛

ヒアシンス・ハウスのこと、その家のとなりに住んでゐる絵描きさん(註:里見明正)が六日から写生旅行に行くので、そのアトリエを借りて家の出来上らない先に浦和に移らうとおもひます。浦和からのたよりでは、今花が美しいと言つて来ました

- 4) 立原道造記念館 津村泰範氏調査によるエスキス資料
A. 生田家所蔵「別所沼のほとりに建つ風信子ハウス設計図」2枚いずれもトレーシングペーパー1937(昭12)年12月頃
B. 神保家所蔵「HAUS・HYAZINTH」2枚いずれもトレーシングペーパーに着彩 1938(昭13)年2月12日
C. 柴岡家所蔵?「HAUS・HYAZINTH」2枚Bと同一?
D. 猪野家所蔵「LA VILLETTE DEL URAWA」はがきの裏面 1938(昭13)年2月頃
E. 小場家所蔵「LA VILLETTE DEL URAWA」はがきの裏面 1938(昭13)年2月7日
F. 所蔵不詳「新建築」1940年4月号掲載平面図 1938(昭13)年
- 5) 18世紀のピクチャレスク派と呼ばれた造園家が多く用いた造園設計手法の一つ。歴史的風景画をモデルとして、歴史と人工を感じさせる建造物が、風景に点在し、連想を誘うように、神殿・彫像・橋などの古典的点景物やゴシック様式の寺院・城を多くの場合、あらかじめ廃墟として設計し配置した。
- 6) <倒置の考古学>という独自の設計方法を用い、パリ近郊のニュータウン計画に先行した古代都市のイリュージョンを与え、空疎で住民に不安を与えがちなニュータウンの空間に、意味体系を形成しようとした都市デザイン的な実験。

参考文献

- 1) 詩人の夢の継承事業 -別所沼公園移管記念事業の提案- 2003年4月 ヒアシンスハウスをつくる会
- 2) 浦和市史 通史編 1987年 浦和市
- 3) 浦和市史 通史編 1988年 浦和市
- 4) 浦和市史 通史編 1990年 浦和市
- 5) 新編埼玉県史 通史編6 近代2 1989年 埼玉県
- 6) 埼玉県の都市公園 2003年 埼玉県
- 7) さいたま公園散歩 別所沼公園 1992.5.28 埼玉新聞
- 8) 浦和画家とその時代 2000年 うらわ美術館
- 9) 目で見る浦和の100年 2000年 郷土出版社
- 10) 立原道造全集 第5巻 書翰 1973年 角川書店
- 11) 立原道造全集 第6巻 雑纂 1973年 角川書店
- 12) アントワーン・グランバック(訳/古林繁) 建築そして記憶が明らかに必要であるということ 都市住宅 7612 鹿島出版会